

## 『寄生獣』のなかの自己論

生 越 達\*

(1999年4月30日受理)

### The Self Represented in “Kiseiju”

Toru OGOSE

キー・ワード：自己，他者（非自己），相互依存性，相克性，共存

『寄生獣』を，そこで描かれている自己の在り方に焦点をあてて論じる。方法としては現象学の助けを借りながら，『寄生獣』のなかに映し出されている，現代を生きる私たちの求める自己の在り方を明らかにすることを目指す。ハイデガーは人間存在を世界内存在と位置づけたが，そこから導かれることは自己を世界や他者を構成する出発点として絶対視することへの疑問である。むしろ他者や世界との関係のなかから自己が析出されてくるのではないか。『寄生獣』においても他者の重要性が描かれ，自己を世界の中心に置くことの傲慢さが示唆されている。しかも自己の絶対視は人類の「生命」という見地からもよい戦略とは言えないのである。そこで自己と他者の共存の在り方を捉えることが求められる。『寄生獣』における共存は，「相互依存性」という言葉で規定されるような在り方である。つまり『寄生獣』は，人間の自己もまた他者との対話を必要とする依存者であることを明らかにしているのである。しかも『寄生獣』において重要なのは，他者は決して自己を包んでくれるような相乗的な他者ではなく，他者の他者性として自己を襲う相克性の他者だということである。あるいは相克性を乗り越えて始めて他者との共存が成り立つということである。

### はじめに

この小論においては，岩明均の漫画『寄生獣』を取りあげ論じたいと考えている<sup>1)</sup>。こうした「非現実的」な作品を取りあげること，しかも漫画を取りあげること自体が，そもそもどのような意味をもちうるかについては本来丁寧な考察が必要なかもしれない。ここでは以下の二点について指摘することにとどめておきたい。一つは，真理は現実のなかに閉じこめられるものではないの

\*茨城大学教育学部教育学教室

ではないか、ということである。非現実的であるとは、現実的ではないということ（「非一現実的」）、現実ではないということ（「非一現実的」）の二つの点から考えることができる。現実的でないという点に関しては、たとえば、分裂病者の世界は現実的ではないかもしれない。しかし、そうした分裂病者の世界の存在は現実である。そして彼らの世界の中に人間の真理が存在するという点もまた疑いない。私たちの常識的世界にとっては隠され、曖昧にされた人間の真理の一面が分裂病者の世界にはあるのである。一方、現実でないという点に関しては、文学や漫画があてはまる。それらは、フィクションである。したがってどんなに現実的に描こうとも現実ではない。実証性は始めから問題になりえない。だが、この小論の出発点は、それでもむしろ現実でないからこそ人間の真理を端的に表現しているということがあり得るのではないか、ということである。しかしここには一つの困難が横たわっている。それはどの作品が人間の真理に触れうる作品なのか明らかでないからである。私たちは作品を解釈する前提としてそれが現実であるという地盤を奪い取られてしまっている。しかもこの小論では漫画を取りあげようというのである。そして『寄生獣』という作品は現実らしさからも無縁である。荒唐無稽なストーリーが展開する作品である。したがって『寄生獣』を取り上げる意味があるか否かは直接明らかになるようなことではなく、解釈の結果を示していくことによって代替するほかにないと思う。一つだけ言えることは、作品は社会の雰囲気や状況を反映しているのではないか、ということである。自ずからその社会の状況やそこでの問題を映し出しているのではないかということである。

さて、具体的に『寄生獣』を捉える視点としては、自己とは誰か、あるいは何かということを取りあげていきたい。自己は他者との接触によって始めて自己となりうる。したがって、そこでは自己と非自己（他者）の関係が問題となるはずである。たとえば最近社会問題となっているアレルギーは、他者の侵入に対する過剰な拒否反応である。免疫とは自己と非自己を識別することによって、非自己を排除し、自己を守る働きだが、アレルギーについて考えると、自己が必要以上に他者を受け入れられない状況が生じているようにも思われる。そこではいったい何が自己で何が非自己と判断されるのであろうか。たとえばニワトリにウズラの脳を移植する実験においては、ニワトリの免疫系の働きにより、個体の自己を決定するかに見えるウズラの脳が排除されることが確かめられる。とするならば自己は脳にあると単純に前提するわけにもいかないことになるだろう。

脳でさえ時には他者となりうるのである。他者は必ずしも自己の外部にあるのではないかもしれない。そして自己というものはそれほど確かなものではないのではないかという疑問が生まれてくる。また自己と非自己の識別が狂うと、自己を守るはずの免疫が自己を破壊することも生じてくるという。さらには自己がもし他者をまったく受け入れないとすると、そこには閉鎖的な構造が生み出されてしまい、したがって自己は何らかの「開け」を必要としているはずである。閉鎖的な自己は開かれた状況に適応できないからである。

こうした自己、あるいは自己と他者との関係の問題は、単に研究対象の理解ということに留まる問題ではない。実践的研究者はつねにすでにこの自己と他者（非自己）の関係の問題に関わってしまっている。研究の場は、まさに自己と他者が具体的に関わる場であるからである。

たとえば、佐藤は、授業という場で生じている潜在的カリキュラムとして、実存的・倫理的実践と社会的・政治的实践を挙げている<sup>2)</sup>。まさにこれは自己と他者の問題領域の提示であり、しかもこの二つの実践は決して単独で生じるのではない。佐藤の指摘は、教育学にとって、この自己と他

者の問題が学それ自身の方法論の根底に存することを述べていることになる。教師は自他の関係を生きてしまっている。また臨床に携わる研究者も同様である。もちろん、一対一の関係を生きるカウンセリングのような場合と教師を典型とするような一対多の関係では、自他の生起の在り方は異なっているだろう。だがいずれにしても自他の関係そのものへの反省を学そのものが必要としていることは一致しているはずである。

実践的研究者である「わたし」は、研究対象である「他者（子ども）」との間に一定の関係を築くことになる。そしてこうした関係を築くのは現実の日常的な世界においてなのである。そこでは研究者は「わたし」の存在をその生々しい世界から切り離すことはできない。決して世界の外部に立つ無世界的な存在者になどなれないのである。研究者もまたひとりの「わたし」として歴史性を背負い世界の中に存在する自己として他者と関わっているのである。実践的研究においてはこうした生身の「わたし」がいかにして他者である研究対象を理解することができるのかということ位置づけることが研究の出発点であり、地盤なのである。たとえば精神医学者のメダルト・ボスが患者の世界というよりはむしろ患者と治療者の関係の在り方をその研究の中心においたことも、上記のような実践的研究の位置からよく理解できることになる<sup>3)</sup>。この意味で子どもたちの世界を記述することは研究者である「わたし」が他者である子どもを記述することであり、自己を記述することでもあることになる。しかも先に佐藤を引用したように、まさに教育や臨床の場は関係が人間を癒した成長させ、あるいは逆に歪める事態を示唆している。子どもを成長させるのも他者との関係であり、子どもを問題状況に追いやるのも他者との関係なのである。そして彼らの自己をどのように受けとめていくのかということが教育の大きなテーマとなるのである。

## 1. 「わたし」は出発点であるか

フッサールの現象学は、すべての存在者の存在を括弧に入れ、そうした存在者が私たちに現れてくるその在り様を捉えることを課題とする。この世界の根拠（可能性の条件）を捉えることがフッサールの目的である。そしてそうした現れが生起する領野を超越論的主観性と呼ぶ。フッサールにおいては、あらゆる存在者の存在が現れてくるのはわたしの意識の明証性においてであると考えられ、したがって超越論的主観性こそがすべての根底になければならないことになるのである。別の言い方をすれば、フッサールは世界の出発点として明確な自己意識を考えているのである。そこでは自己意識としての自己は、疑うことのできない絶対的な拠り所なのであり、すべては自己を根底において生きられるのである。こうした出発点は近代人である私たちにとっては、理解しやすい出発点であろう。私たちにとって個としてのわたしは確かに絶対的に確かなものに思われるからである。

もちろん、フッサールが絶対の拠り所である自己（超越論的主観性）を素朴に前提にして問わなかったということではない。フッサールは根拠としての自己の存在に安住することなく、この自己それ自身の根拠をも問い続ける。フッサールの問いは自己であることの根拠にまで及ぶ。彼の思索によれば、反省する自我はつねに反省された自我の背後に隠されるわけだが、こうした反省する自我は生き生きした現在において自我遂行しているのである。したがって、この生き生きした現在において成立している自己、決して反省の対象となりえない自己が生起しているはずである。この自

己は流れることそのものとしての原受動性としての自己である。流れることとしての自己は、自己がその根底においては留まらないこと、あるいは移りゆくこと、つまりは否定性によって規定されていることを示している。

一方、フッサールは客観的な世界の構成に無関心だったのでもない。自己(超越論的主観性)を出発点としてどのように世界の構成に達しうるのかは、フッサールの研究の一つの課題である。そこで中心的なテーマのひとつになるのは他者の構成についてである。それが自己移入論である。超越論的主観性によって他者はまず「身体物体」として捉えられる。そしてそれがやはり物体であるわたしの身体と「類比的」に「統覚」され、その物体が身体として捉えられるようになる。そしてその身体はあたかもわたしがそこにいるかのように「自己移入」され、わたしと同じように一つの意識をもった他者として構成されるのである。だがこうした考え方は、少し考えれば、真の他者を捉えられていないように思われてくる。なぜなら、こうした自己移入論によって捉えられる他者は現実の他者ではなく、あくまでも「自我の変様態」としての他者だからである。

果たして他者は「自我の変様態」として捉えられるような存在者なのだろうか。また他者はこのように措定的に構成される存在と考えていいのだろうか。ここではあくまでも可能性としてではないが、もっと受動的に生起し、しかも自我の成立の後に変様態として構成されるのではない自己の根底にともにあるような他者の存在は考えられないのだろうか。

実際の他者経験を考えたときにも、フッサールの他者論は必ずしも日常的な経験と一致しないように思われる。他者が「自我の変様態」だとすると、私たちがサルトルの言うように他者の眼差しを恐れたり、また逆に他者に受容されることでこの世界に居場所を得たりすることが説明できないように思われる。他者の存在が自己を脅かしたり自己を成立させたりすることは、他者が自己の内部に深く浸透していることを示しているように見える。自我の変様態として他者を捉えることは、不意打ち的に襲ってくる他者の他者性を捉え切れていない。決して自己であることをはじめに前提しておいて、そうした安定した自己の成立後に他者と関わるといようなことではなく、むしろ他者と関わることの中で同時的に自己が析出してくるようにも思われるのである。また、たとえばテレビで柔道の試合を集中して見ているようなときに、熱中のあまりつい見ているわたし自身の身体が選手と同じ動きをしてしまうのをどのように説明したらよいのだろうか。あるいはサッカーのデフェンスで相手の動きに自然と身体が反応してしまうことをどのように理解したらよいのだろうか。こうした出来事を身体が類比的に統覚されるというフッサールの捉え方で十分理解できるのだろうか。

またフッサールの理論に内在する問題としても、類比的統覚ということのうちにはすでに他者の微妙な特徴が内在している。つまり類比的統覚において他者の身体が捉えられるとき、それが自己の身体と間違えられることがない以上、すでに何らかの意味での他者経験を前提にしているのである。他者が他者として措定的に捉えられる以前に実はわたしと他者は根底のところでは「ともに」あるのではないか<sup>4)</sup>。

いずれにしても、フッサールの自己論や他者論のなかから見えてくることは、自己を世界や他者を構成する出発点として前提することに対する判断中止が必要なのではないか、という問いである。ハイデガーが、人間を「現存在(Dasein)」,あるいは「世界内存在(In-der-Welt-sein)」と捉えたことも上記のような前提への批判として考えることができるように思われる。わたしを一つの

閉じた構造として前提し、そこから出発して世界や他者を捉えようとする捉え方ではなく、むしろ世界や他者をわたしの内部に巣喰う存在として捉えることが求められるのである。もちろんこの場合、他者を自己の主観性が創り出したものと考えすることはできない。あくまでも他者は自己の主観性の内に治まる存在ではない。自己を巣喰う存在なのである。ある意味で、他者がわたしから切り離すことのできる外部にいるのなら楽である。他者との間に自己を守る壁を作ればすむことになるからである。どんなに恐い他者であろうと、そうした他者の恐怖を緩和する方法を学ばばいいからである。だが他者が自己の内に深く巣喰っているとすると、あるいは他者や自己を前提して考え始めること自体が誤りなのであり未分化な状態から自己や他者が析出してくるのだとすると、他者から自己を守るという手段は自己そのものをも殺してしまうこともあり得ることになる。

以下においては、こうした問いに答えるべく、『寄生獣』について考えていきたい。

## 2. 『寄生獣』が問いかけること

『寄生獣』を自己論として考える際、二つのレベルで考えられる。一つは人類と寄生獣類との関係において自己論を考えるというレベル、もう一つは泉新一とその手に寄生したミギーとの関係において自己論を考えるというレベルである。もちろん、この二つのレベルは複雑に絡み合うのであり、完全に切り離すことはできない。ここでは始めに新一とミギーとの関係に焦点を当てながら、より一般的な自己論へと考えを進めていきたい。

泉新一はある日、ある不思議な生物に襲われる。そのいわば寄生獣は脳を喰うことによって人間の身体をのっとり存在なのであった。新一の場合、寄生獣は脳を喰うことに失敗、右手を食べるのみに終わる。その結果、一つの身体を新一と寄生獣の二つの存在が共有することになる。右手に住みついた寄生獣はミギーと名付けられる。ミギーもまた独立した意識をもった存在者であり、ここに二つの意識とひとつの身体（新一の右手はミギーによって動かされることもあり、厳密な意味で一つの身体であるとは言えない）をもった存在者が生まれる。身体としての泉新一（広義の泉新一）は、狭義の自己としての泉新一（寄生される以前からの泉新一）と、この狭義の自己に対する他者（非自己）として機能するミギーという二つの存在者、つまり自己と他者（非自己）によって構成される場として成立することになる。そして生きていくための場として同じ身体を共有している以上、彼らは「ともに」生きていくほかないのである。そこに一つの共生が始まるのである。

さて、それでは広義の新一の身の上に生じている共生はいったいどのような共生なのだろうか。それは変わることに開かれた共生だということである。漫画の中では新一の恋人として村野が登場する。彼女がしばしば言うのが「きみ、泉新一くんだよ」という言葉である<sup>5)</sup>。共生を始めた当時、当然のことではあるが、彼ら（新一とミギー）は互いに違和感を感じている。お互いにそれぞれの世界に基づく世界観をもっていて、それが衝突するからである。寄生獣が人間を殺して食べていることは新一（狭義）にとっては、人として耐えられないことであり、ミギーにとっては生物として自然なことである。しかもミギーにとっては種としての人の命の大切さなどは理解できないことである。「尊いのは自分の命だけだ・・・わたしはわたしの命以外を大事に考えたことはない」<sup>6)</sup>。「わたしは自分自身の味方であって「ヒト」という一つの種の味方じゃない」<sup>7)</sup>のである。

また人間である新一（狭義）のもつ感情は寄生生物にはない。「人間で言うところの『情』という感覚は寄生生物には育たない」<sup>8)</sup>。そして寄生獣である田村玲子の子育てもまた端的に寄生獣が感情をもたないことを示している。子育てを飼育、あるいは調教と呼び、あかちゃんを片手でもちあげる様子はそのことをはっきりと示している<sup>9)</sup>。

こうしたことは、まず、共生、あるいは「ともに」生きるということが決して心地よい一体化として生起するのではないことを示している。新一とミギーとのあいだの共生とは、決して口当たりのよい理想論ですまされるような「みんな仲良く、みんな一緒に」といった出来事ではない。まさにミギーの言うように、自分の存在が何よりも大切で、そしてそうであるからこそ、その自分の存在を守るために共生が求められるのである。相手を排除してしまいたいというぎりぎりのところで、彼らはお互いを必要としている。特に寄生獣であるミギーからすれば新一の身体はどうしても必要なのである。けっして新一の身体なしには生きていけないからである。「分業」して生きていかなければならないのである<sup>10)</sup>。

だがこうした双方の相反する利益とそこから生じる見方や違和感こそが、新一（狭義）が変わっていくことを可能にしている。しかもお互いに他者である相手方とつきあうことにより、共有できる新しい自己と世界像とを創り出していく。そのことが典型的に示されるのは、ときに新一がミギーの言うようなことを言い、逆にミギーが新一の言うようなことを言うことが生じる場面である。そこでは自己中心の見方が相対化される。自分を守るというぎりぎりのところで、相手の見方への真の尊重が生じる。そして相手の見方が建て前としてではなく自分に現れてくる。

感情の交流もまさにそういうことだろう。感情は共生のための鍵となる。ときに新一が子犬の死のことで即物的なもの見方に陥ってみたり、逆にミギーが新一のものの見方を自分のなかに取り入れていったりする。互いにお互いの感情を味わいながら共生をすすめていくのである。

世界やお互いに対する見え方の違いは、新一とミギーとの関係のみには留まらない。人間と寄生獣との関係もまた同様であることがしばしば述べられる。人間にとっては化粧をして着飾った美人も、寄生獣にとっては、「いろいろな不純物が体にこびりついている・・・ヤニくさいし妙な薬品のおいがする」<sup>11)</sup>餌ということになってしまう。また「シンイチ・・・『悪魔』というのを本で調べたが・・・いちばんそれに近い生物は やはり人間だと思っぞ・・・人間はあらゆる種類の生物を殺し食っているがわたしの『仲間』たちが食うのは ほんの1～2種類だ・・・質素なものだ」<sup>12)</sup>とミギーは新一に訴えかける。

寄生獣と人間との共生はこの漫画を貫くテーマでもある。寄生獣である田村玲子は寄生獣の存在の意味を問い続ける。そうしたなかで新一と田村玲子との会話で、直接的に人間と寄生獣との共存が話題となる。寄生獣と人間との共存をとく寄生獣田村は次のように言う。「例えば人間と家畜は共存しているといえない？もちろん対等ではないわ ブタから見れば人間は一方的な人（ブタ）食いの化け物になるわけだしね」<sup>13)</sup>。共存するとは必ずしも仲良くすることではない。それは新一とミギーとの関係に限られる問題ではなく、人類と世界との共存においても同型的に捉えうる問題なのである。そして寄生獣の存在が訴えかけていることは、自己の肥大化した人間に対する他者としての寄生獣との共存の必要性、対象化することによって人間の道具とはしえない他者の必要性なのである。自己は他者を排除したところでは生きていけない。自由な自己を目指して、世界の他者性を殺し続け、対象化・道具化して飼育慣らそうとした結果が現代の状況なのである。

『寄生獣』の冒頭において人間の数の増えすぎへの危機感を「地球上の誰か」<sup>14)</sup>に託して語っている。しかし、この漫画には、そうした人間の数の問題だけではなく、人間の存在様式への強い批判が込められているように思われるのである。つまり寄生獣は人間を食べる結果、人間の数を減らすことによって地球を救うというよりは、世界や他者を対象化・道具化しようとする人間存在に対して警告を発する役割を果たすために出現したように思われるのである。他者との対話が自己を救い出す。

こうした点から考えたとき、寄生獣が、まったくの外部から怪物・化け物として人間を襲うのではなく、人間に寄生し「とも食い」という仕方人間を襲うことの意味も、よりはっきりと捉えられる。すなわち他者はただ単に人間を殺すために存在するのではない。寄生獣は人間の自己の内部に巣喰うのである。そして寄生獣の受けている命令は「この『種』（人間）を食い殺せ」<sup>15)</sup>ということだが、それは人間的自己の横暴から地球を守るための命令なのである。このことを共存との関係において捉えるならば、先に新一とミギーとの関係において述べたのと同様、共存は口当たりのよいみんな仲良くから出発することはできないことになる。まさにとも食いという限界において共存が試されるのである。そしてそれは自己の深部に他者を抱え込むことを人間に求めるのである。他者の絶対的な他者性が必要とされる。

人間は、人間という種に対して特別な感情をもっている。それは既に述べたように、新一とミギーとの会話のテーマの一つである。新一にはつねに人間という種全体の利益が意識され、ミギーにとってはもっぱら自己の生存が関心的である。ミギーには人間の献身が理解できない。ミギーは言う。「人間の心で特に理解できないものは・・・『献身』というやつだな」「つまり自分にとって損でも他人のために何かをする・・・わたしにはさっぱりわからん」<sup>16)</sup>。あるいは、新一が、負けると分かっている相手にも立ち向かっていく場面がある。新一は言う。「人間には・・・引くに引けない時ってのがあるのさ・・・そこがおまえらと違うところだ!」<sup>17)</sup>。この漫画にはこうしたやりとりが新一の行動を通して何度も出てくるのである。

新一とミギーとの対話は人間と寄生獣との関係としても捉えられるだろう。たしかに人間の意識は狭い意味での自己を越えて同胞へと視野を広げる想像力を備えている。同胞という他者に開かれていることは、人間存在の本質であると言ってもいいかもしれない。だが人間は、他者に対する想像力の欠如により際限のない自己中心的な存在者にもなりうる。開かれている（存在の自由）からこそ、閉ざすということも可能になる。人間の自己は他者に開かれているからこそ他者を殺すこともできる。人間の意識は独我論へとつながる危険性をつねにもっているのである。その一方で人間は、新一の行動にしばしば現れるように他の人間、あるいは人間という種に対するいわゆる愛他的な行動をとりうる存在者である。それはあたかも人間が独我論に陥らないための防波堤の働きを与えられているかのようである。この意味で愛他性は人間存在の維持のための装置として捉えうるものである。人間は他の動物と異なり際限のない独我論に陥る可能性をもった存在者である。そして人間がこの世界で生きていくためのバランスを与えてくれるシステムとして愛他性が働く。だがこうした愛他性は人間を越えては機能しにくい。また現代は人間ひとりひとりが孤独化し、こうした愛他性そのものが働きにくくなってきている。

そこで寄生獣が絶対的的他者として登場し、人間の独我論にメスを入れるのである。寄生獣田村玲子は言う。「寄生生物と人間は一つの家族だ われわれは人間の『子供』なのだ」<sup>18)</sup>。寄生獣はも

とも独立の存在者としては生きられない。人間にとっての他者としてしか生きられない。ミギーにとって新一の健康や生が大切だったように、寄生獣は人間を食うにしても人間の存在なしには生きていけない存在者なのである。寄生獣は人間の存在を前提にして始めて生きることを許される「か弱い」<sup>19)</sup>他者なのである。寄生獣は人間を滅ぼすために生まれてきたのではない。あくまでも人間の他者として人間と共生するために、そして人間がこの世界と共生していくために生まれてきたのである。

ここで注意すべきは『寄生獣』を流れる人間観についてである。それは田村の口を借りて語られる。「人間と我々が大きく違う点・・・それは人間が何十 何百・・・何万 何十万と集まって一つの生き物だということ」<sup>20)</sup>である。「人間は自分の頭以外にもう一つの巨大な『脳』をもっている」<sup>21)</sup>のである。それが人間と寄生獣の大きな違いである。また、田村は新一を心配する村野に対して「うらやましい」<sup>22)</sup>とつぶやく。感情によってつながっていく能力を持つ存在として人間を認め、自分たち寄生獣にないそうした関係性をうらやましいと言ったのである。人間は感情により非常に孤独な自己でありながら他者とつながることを許される。

たとえば蜂や蟻の世界を見ていると、ふとどこに彼らの自己があるのかといった疑問が生じてくる。一匹一匹はあたかも一つの蟻の巣を身体とする生き物の臓器であるかのように自らの仕事をこなしている。そうだとすれば、人間だってそれぞれの細胞が個々の蟻にあたるのであって、一人の人間はそうした個々の細胞が生きる場に過ぎないとも捉えられるようにも思われてくる。あるいは逆に個々の人間が一匹の蟻だとすると、一人の人間などはもっと大きな存在に組み込まれた一つの細胞に過ぎないようにも思われるのである。そしてむしろそうした全体の中で自己を放棄できるのならばそれはとても心地よいことなのかもしれない。ミギーが多くの寄生獣を取り込んだ一つの生命体である後藤に取り込まれたとき、「それが何とも気分がよくて・・・このまま無敵生物『後藤』の一部分として生きるのも悪くない気がしていた」<sup>23)</sup>と語っている。

だが人間は、一人の人間としての強烈な自己意識をもっている。だからこそ他者を必要とするのではないか。他者への開けは、こうした自己の在り方の結果であり、またこうした自己であるからこそ開けを必要とするのである。人間は同胞を必要とする一方で、蜂や蟻の様には生きられない。だからこそ感情をもち、愛他性をもち、他者とつながっていく。そしてこうして他者とつながることで自己であることが可能になる。その他者は、自己を引き裂く他者であり、人間を食い殺す他者である。だが同時に、感情でつながり会っていく他者である。人間は自己である限りミギーのように他者と一体化はできない。新一は言う。「あいつら（寄生獣）はせまい意味じゃ『敵』だったけど広い意味では『仲間』なんだ」<sup>24)</sup>。人間の自己にとって他者は永久に敵であり仲間であるといった両義的存在である。

### 3. 「相互依存性」としての自己

『寄生獣』においては「生命（生きること）」の「相互依存性」が描かれている。「寄生」という言葉に込められているのはそうした相互依存性である。人間にとって寄生獣は寄生生物である一方、寄生獣にとっては人間が寄生生物なのである。ここでこの「相互依存性」について考えてみる

と三つの特徴が捉えられる。

(1) 眼差しの相互性

第一は眼差しの両方向性である。相互依存性は「相互」依存性なのである。生きることは世界に開かれていくことを必要とする。それは言い換えれば自己が柔構造をもつこと、変化への可能性をもつことである。だが一方で「生命（生きること）」にとってこうした柔構造が必要であるにも関わらず、肥大化した自己意識は自己を守ることへと方向づけられもする。自己意識は他者を排除することによって自己に留まろうとする。だが閉ざされた過剰な自己意識は「生命（生きること）」の戦略としては問題がある。そうした自己意識は自己の中の他者（非自己）に我慢できなくなるし、自己と他者がふれあう境界面に過度に敏感にならざるをえないからである。

そこに例えば清潔志向が現れる。この清潔志向は二重の意味で自己であろうとすることを妨げる。

一つ目は、すでに述べたように、自己の内の他者（非自己）に不寛容になるということである。過剰な自己意識をもった自己は純粹志向の自己なのである。自己は理想化された自己像（外なる自己）に迎合する。だがこうした自己を維持することは難しいだろう。つねに自己の中の他者を切り捨てていかなければならないからであり、その結果自己はどんどんやせ細っていくことになるからである。自己の内の他者であるいわゆる無意識は、ますます見えないところへ追い込まれていく。自己は表層へと取り集められる。個としての自己は苦しい状況に追いやられる。

二つ目は他者の風景化である。他者は排除され自己から遠いところにおき捨てられていく。遠くにおかれてしまえば、そうした他者に対して感情を向けることは不可能になる。他者への思いは届かなくなり、他者は近さを奪われる。したがって他者の風景化が生まれてくるのである。他者が自己にとって他者として現れてくる可能性さえも奪われ、ただの風景となる。そして種としての人間が生きていくことが困難になる。寄生獣田村の言うように全体としての人間という構造が壊されるからである。他の人間への眼差しが失われていくからである。人間という種全体の自己が分断されてしまう。自意識過剰の個としての自己の生存が第一義的になり、人間としての集合的な生命など、たんなる個としての自己の寄せ集まったものに過ぎなくなる。種としての人間が成立しにくくなる。他者はハイデガーの捉えるように、すべてこの個としての自己にとって対象化されるだけの存在者に過ぎないことになる。世界は世界像となる。種としての自己は苦しい状況に置かれる。本来的には出会い・対話の能力であるはずの自己が、出会い・対話の可能性を奪われる。

『寄生獣』はこうした二重の閉塞状況を生み出す境界面を壊そうとする。それが寄生獣の存在であるし、また寄生獣の人間に対する眼差しである。寄生獣の問いかけにより、新一は個としての自己からの見方を揺すぶられ、つまりは自己の存在を揺すぶられる。自己と他者の境界面にメスを入れられる。種としての人間は種としての自己の見方を揺すぶられ、つまりは種としての自己の存在を揺すぶられるのである。自明性のうちにある自らの見方を相対化するような機能を寄生獣は担っている。自己の見方に問いを返してくる寄生獣は自己の絶対性に対して問いを投げ返してくるのであり、自己と他者の境界に働きかけてくるのである。そして自己は出会い・対話の可能性を取り戻す。自己はその眼差しの絶対性を奪われること、すなわち存在の相互性を獲得することにより、自己であることが可能となる。

## (2) 存在の依存性

既に述べたように、人間にとって寄生獣は寄生生物であるし、寄生獣にとって人間は寄生生物である。これまで人間と寄生獣として名前に相違はあったが、お互いに寄生獣なのである。互いに互いの存在を必要としているのである。「生きること（生命）」は自己と他者という二重構造を必要とするのである。だが近代の自己論における自己の発達はつねに依存から自立という方向を目指してきた。個性の尊重、個を大切にすること、こうした言い方のうちにあるのも、「わたし」であることの出発点に、独立していて犯しがたい個の存在があるということであろう。『寄生獣』はこうした個の在り方に疑問を投げかけているように思われる。人間の自己意識は反省能力を持つことにより、他者や世界を対象化して捉えることを可能にした。だがこの対象化して距離をもって捉える能力は、自己の存在を特別視するというを生み出す。

フッサールのように、自己（超越論的主観性）を世界を構成する出発点としておき、他者を自我の変様態として理解するのは、自己の特別な位置を考えれば当然であるように思われる。だが実は、フッサールの後期の思想の中に描き出されていたように、自己はその根底に他者を抱え込んでいるのである。『寄生獣』では寄生獣が人間を食べる（とも食いする）という仕方では、この自己の根底に抱え込んだ他者を表現しているように思われる。他者は決して自己の外にいないのではない。したがってまたこの他者を排除するという仕方では問題は解決しない。この他者はつねに自己に働きかけてくる他者であり続ける。したがって決して内面化して自己の一部となったような他者ではあり得ない。その意味で他者は理性を越えている。また個々の身体を越えている。常にそれは個としての自己、さらには種としての自己を襲う存在である。内にありながら、しかも襲う存在、つまり「とも食い」する存在なのである。自己とは、本来的には、出会い・対話の可能性そのものである。出会い・対話の可能性を失ったときに人間は自己であることをやめる。決して単に自己が出会い・対話の可能性を「もつ」に過ぎないのではない。

## (3) 共存の成り立つ場の相克性

上記のことはまた、相互依存する自己と他者が、第一義的には、決して融合し解け合うような関係ではないことを意味する。人間と寄生獣との共存は相克性のうちにあり、互いにできれば他を排除したいのである。人間にとって寄生獣は人間を襲う最も恐ろしい他者である。他者とは不意打ち的に襲ってくる存在である。互いが互いの利益であるような共存の在り方とは異なる仕方の共存がここにはある。少なくとも表面上は、人間と寄生獣とは決してお互いに利益が一致したりはしない。人間にとって寄生獣は自己を滅ぼす他者なのである。また寄生獣にとって、というよりはこの地球にとって人間は地球という自己を滅ぼしつつある他者なのである。

ミギーと新一においても基本的には同様である。お互いに考え方や価値観が異なり、そこには対立が生じる。だが、彼らは一つの身体を共有している以上、離れることはできない。ぎりぎりのところで「ともに」生きていかなければならないのである。こうした構造は人間と寄生獣との関係にも当てはまる。人間と寄生獣は同じ地球という身体を共有している。したがってどんなにももの見方が対立しようと、利害関係が対立しようと「ともに」生きていかなければならないのである。た

しかにお互いはお互いの生を犯さざるを得ない。人間は人間が生きていくためにこの地球を壊すことが必要となる。また寄生獣は自分たちが生きていくために人間を食べることを必要とする。こうした互いに相手を犯さないと生きていけないぎりぎりの関係の中で「ともに」生きていくことを求められるのである。

ここには自我の変様態としては捉えきれないような他者がいる。不意打ち的に襲う他者、他者性を失うことなく持ち続ける他者である。サルトルの他者論における眼差しのように、人間をまさに「餌」として、固有化し、対象化してしまう他者である。決して一体感、あるいは共感や理解のうちに解消し得ない他者がここにはいる。端的に自己を否定するのが他者である。あるいは否定の原理そのものが他者性である。

だが『寄生獣』の訴えかけることは、こうした他者が地球という場が成り立つために、さらには自己という場が成り立つために必要だということである。傷つけられない自己であることは自己であることを傷つけられることである。『寄生獣』はそうしたことを訴えかけているように思われる。他者の本質は私とは相いれないこと、異質なことである。そもそもこの異質性を受けとめないところには、他者は存在し得ない。他者であること自体が「差異」や「異質さ」の把握と同時に生起することだからである。そうでなければ決して「他者」が捉えられることはない。既に述べたように、フッサールの思索において、他者の身体が自己の身体と「類比的」に統覚されることにも、すでに他者の理解が潜んでいる。そうでなければ一つのものとして捉えられることはあっても、二つの平行するものとして、つまり「類比的に」理解されるはずがないからである。そしてこうした他者の存在の働きかけによって始めて自己が自己として生きられるということが『寄生獣』では描かれている。それは自己の根底に他者を抱えることが自己であるということである。寄生獣は人間の子どもなのであり、寄生獣と人間はふたつでひとつのもの、あるいは家族なのである。

なぜなら、自己はその内部に他者をもたないと、あるいはつねに他者性にさらされていないと、その柔軟性を失い、自己そのものが衰退してしまうからである。新一はミギーという他者と生きることによって自分のものの見方を揺すぶられる。当然その過程では、相手の見方に取り込まれ自分の見方が崩されて不安定な状況に陥ることもある。また相手のことが信頼できないこともある。しかしそうしたプロセスを経て自己であることを確かめ、柔らかい自己を形成していくことが可能になる。また人間は寄生獣という他者と生きることによって、個としての自己に閉鎖することから免れると思われるのである。種というレベルで考えたとき、個としての自己に閉鎖することは自己を殺すことであるが、そうした自己意識の肥大に対して寄生獣の存在は問いを投げかける。個としての自己が第一義的になり、さらには絶対的なものになるような自己の在り方に対して、寄生獣は、種としての人間の自己の存在、あるいは地球というひとつの自己の存在へのまなざしを開いてくれる。ひとりひとりの絶対的な個としての自己があって、この社会、あるいは地球が作られるという視点とは異なった視点、つまり全体の生命（集約的な自己）といったものが実はあるのであって、そうした生命がひとりひとりの自己の生きることのうちに見えてくるといった視点を『寄生獣』は提起しているのである。こうした共生の原理は、自己であろうとするぎりぎりのところで成立する厳しいものである。

もちろん、ここで他者の相克性ばかりが強調されてはならないだろう。それはミギーと新一との関係のなかに示されている。第一に、「分業」といった言葉に現れているように、彼らはお互いに

他者を抱え込むことによって、広がりのある生を可能としている。第二に、『寄生獣』では他者との一体化も一つのテーマになっている。ミギーは一時期寄生獣と一体化しているが、その時の気持ちは「意外なことにとても心地よかった」<sup>26)</sup>のであり、「眠っていないながらも常にいろいろな情報が心の中を駆けぬけていく感じだ・・・それが何とも気分よくて・・・このまま無敵生物・・・の一部として生きるのも悪くない気がしていた」<sup>27)</sup>のである。そしてミギーは、最終的に、新一の右手に戻っていく。このことは相克性が実はその根底に他者との相乗的な関係性を潜ませているとは考えられないだろうか。つまり人間と寄生獣がひとつの家族であるということは、相克性の背後には相乗性が隠されていることを意味するのではないだろうか。だが寄生獣と異なり、人間はこの一体感に安住することはできない。自己であるためには他者を必要とするからである。この意味で自己は運動である。

#### 4. 出会いとしての自己

『寄生獣』は「自己とは誰か」という問いを投げかけている。結論は、自己は個としての自己として閉鎖し、外の世界を外の世界として区別することによってむしろ弱体化するということである。個としての自己に閉鎖することにおいて、自己は唯一絶対の出発点となる。そして他者や世界はその自己によって二次的に構成されたものとして捉えられる。他者は自我の変態となり、世界は対象化され世界像となる。だがこうした状況は自己を弱々しい存在にする。

本来、自己は他者へと開かれることを前提としているのである。自己はその根底に他者を抱え込むことによって、自己として生き生きと生きることが可能となる。もちろん、その場合、他者はいつも自己に寄り添う存在として、あるいは利害の一致する同行者として機能するわけではない。むしろ逆であり、他者は自己を侵害する相克的他者として現れる。そしてそれでも一つの身体、あるいは地球といういわゆる身体を共有しなければならないぎりぎりの関係の中で「ともに」生きるのである。相克性は共生の原理であると同時に、実は自己が自己であるために必要な原理でもある。それは自己であることの根底には他者性との出会いが必要であるということである。

このことは、すべてが「わたし」の自由になると感じられ、世界の抵抗感を感じないで生きることが、実は自己を希薄にするということの意味する。家庭のしつけの欠如として語られることは自己と他者性という枠組みから捉えることのできる問題である。いじめや不登校、さらには学級崩壊の増加においてしつけという言葉がキーワードとされ、父性への憧れが語られることも上記の文脈において理解できることである。この意味で、他者性の重要性をしつけや父性といった概念によって捉えることは十分ではないようにも思われる。『寄生獣』という漫画が存在するのは、現代という時代が自己の希薄化に苦しみ、そのなかで他者との出会いを必要としていることを暗示しているのではないだろうか。

だが、他者は相克性としてのみ現れてくるのではない。確かに人間にとって人類は大切であるだろうし、個人にとってはこのかけがえのない「わたし」が大切である。だがそれは、自意識としては、人間は自己のために生きるのだということの意味しているに過ぎない。自己は他者や地球との関係の中での相乗性をその根底に持っている。自意識とは闇の中の一筋の光のようなものなのであ

る。光を支える闇は、ある意味では「わたし」の存在を越えた見知らぬものであり、不意打ち的に「わたし」を襲うものなのだが、一方では実は「わたし」が「わたし」であることを背後で支える大地であり、自己は他者という闇に依存して成立するのである。自己は他者を排除することによって、より「わたし」らしくなっていくのではない。反対に他者との出会いによって「わたし」らしさをつくっていく存在者なのである。

## 注

- 1) 岩明均『寄生獣』全10巻，（講談社，1990-1995）
- 2) 佐藤は教室が社会的（政治的・文化的・倫理的）場であることを忘れて、学習を心理過程や技術過程として捉えることの限界を指摘している。佐藤学「学校を問うパースペクティヴ 学習の共同体へ」（『学校の再生をめざして1 学校を問う』東京大学出版会，1992）pp.214-219
- 3) たとえば、ボス，M. 1962『精神分析と現存在分析』（みすず書房，1962）
- 4) フッサールもちろんこの点について問いを持たなかったわけではない。またこうした自己への問いは、たとえば、自閉症児や分裂病者の研究が示唆を与えてくれるはずである。だがそうした説明はこの小論の範囲を超えている。
- 5) 以下『寄生獣』からの引用については巻数－ページ数で表す。1-p.60,1-p.64, 1-p.116, 1-p.154,2-p.57,3-p.94, 3-p.107,4-p.49,5-p.39,5-p.41,5-p.54など。
- 6) 同書，1-p.88。同様の発言は1-p.107にもある。
- 7) 同書，4-p.161
- 8) 同書，5-p.81
- 9) 同書，5-p.188
- 10) 同書，1-p.248
- 11) 同書，3-p.180
- 12) 同書，1-p.90
- 13) 同書，6-p.131
- 14) 同書，1-p.4
- 15) 同書，2-p.20
- 16) 同書，2-p.66
- 17) 同書，2-p.82
- 18) 同書，8-p.58
- 19) 同書，8-p.60
- 20) 同書，7-p.136
- 21) 同書，7-p.136
- 22) 同書，8-p.17
- 24) 同書，10-p.135。括弧内引用者。
- 25) 同書，10-p.177

26) 同書, 10-p.135

27) 同書, 10-p.135